
猫

ルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫

【Nコード】

N6809T

【作者名】

ルト

【あらすじ】

小学生の彼女はこんなふうに生きています。

彼女にとって小学生という身分は不満の連続だった。

毎日起きて学校に行かなければならないし、行けばひたすら教科書の文字を目でなぞることを強制される。国語の教科書に面白い小説が載せられていても、それは抜粋されたものであつて続きは読めないし、音読の場所を見失わないためにおちおち集中して読むこともできない。ひと段落ついたところで楽しくもない詩に進む。算数も数字だけ変えたような問題が怒涛のように押し寄せる。手を変え品を変え、手順がひたすらややこしいだけの四則演算を苦行のように続けさせられる。たまにもつと続けてほしい授業があつても、時計に服従して予定が進められる。

休み時間は決められていて好きなだけ遊ぶことはできないし、放課後に遊ぶうとしても校庭は取り合いで上級生が幅を利かせている。そして上級生のなかでもサッカーが一番偉ぶっていて、広く場所を取っている。子供だからといういろいろなことが制限され、子供だからとさまざまなことをやらされる。ピアノを習つてたつて何にも得るものなんかない。欲しいものがあつても親にお願いしなければ手に入らず、機嫌を損ねればそこまでで、またの機会を虎視眈々と窺わなければならぬ。

うんていができても逆上がりができて、えばれるのは仲間内だけで、ふと辺りを見渡せば彼女には到底できないことを誰もが平然とやっている。口をそろえて言いたがる大人になれば、なんて文句は嘘だ。彼女の母は逆上がりができない。誰も彼もが優しい振りして平気な顔で嘘をつく。恐ろしいことに、それが子供のためだと思つているのだ。多くは無邪気に信じ込み、これから先に希望があるとか己を安穩のレールに落とし込む。自分を賢いと思つているやつは、

逆に世間はみんな敵で自分の未来はうまくいかない、と勝手に絶望して現実逃避の世界に身をやつす。さらに馬鹿なやつはそんな世間でも自分だけは勝ち残ると決め込んで、必死に誰かの指示に従って勉強をして、片っ端からいい顔をして立っている。もつと馬鹿なやつは結局なにかなるようになると考えて、夢を見ながらのらくらしている。

そしてどこまでも馬鹿なやつは、そんなどうでもいいことにいちいち不満を持って苛々するような損な目をいつまでも引いているのだ。みんな馬鹿なのだ。

それなりに楽しいと思える瞬間はあっても、すべて不満で幕を引く。

このつまらない方程式が、とても不満だった。

楽しい時間が続いてほしいのに、いつまでだって遊んでいられるのに、日は勝手に暮れて時計は無理やり進んで、赤から藍に化けていく世界は、楽しいと思うときに限って彼女を強引に引きずり回し、日常というサイクルに巻き込んでいくのだ。たまらなく不満だ。理不尽である。

全身でそう主張して、仏頂面で通学路を踏み荒らしていく。

真っ暗になった塀が、薄くなった影が、カーテン越しに室内灯の明るさを見せつける人家が、ヘッドライトを灯して走る車が、道路にぼんやりと浮かび上がるような白色のひし形模様が、世界の全てが、未だ放課後の時間軸に身を置いている彼女に向かって夜を押し付けてくる。

この上なく憎たらしい。

その憎たらしい世界に、灰色の毛むくじらが四つ足を伸ばして立っていた。

「……猫だ」

猫だった。

灰色で縞模様を持った猫が人家の柵の前に立っている。爛々と見開かれた目が怯えたように彼女を見据えている。

ついさっきまでぶら下げていた鬱屈した不満げな顔をすっぱり忘れたかのように、彼女は目を輝かせてそろそろと猫に歩み寄る。猫はびくりと片方の前足を曲げたが、幸いにも逃げ出したりしなかった。尻尾を立てて、中腰で忍び足をするランドセルを背負った女の子を見つめている。コンクリのタイルの隙間に生えた泥土と雑草が、距離を示すグリッドのようだ。

ついに彼女は猫の接触圏内にまで接近する。

猫は興味深そうに彼女を観察していた。いい傾向だ。彼女もわくわくと目を大きくして猫の挙動の一切を見逃すまいと猫を見つめている。彼女はここで急に動くと猫が逃げることを知っていた。チツチと口を鳴らして手を猫の前に差し出す。猫は警戒して手のひらをじつと見ていたが、そつと首を伸ばして鼻の先で匂いを嗅いだ。首をかしげた。かわいかった。声が漏れた。超必死の形相でポリウムを抑えていた。

目だけを動かして周囲をうかがう。ひと気はない。猫は彼女をうかがっている。次の段階に進むか？ 進むか？ 彼女は興奮していた。

慎重に手を持ち上げて、首を優しく指の先でなぞるように触る。

うわあああああああああああ~~~~~！！

彼女は目で絶叫してみせた。

猫はぴくりとへっぴり腰になったが、すぐに動きを止めて彼女が首をなでるのを許す。猫が逃げないのを良いことに、彼女はさらに大胆に猫の後頭部を撫でた。猫が目を細めて顎を上げる。彼女は興奮のあまり鼻の穴を広げながら、切なげにため息をついた。震えそうになる腕を押し留めるかのように上半身を仰け反り気味にして、指だけは淡々と猫を優しく撫で回す。

このままいつまでも撫で続ける気満々だった彼女だが、猫はそう

でもないようだ。するりと彼女の指を抜けて、背後の柵に滑り込んで行ってしまう。

「ああ……」

しゃがみこんだまま、未練たらたな顔で猫が消えた暗がりを見つめる。指先がわきわきと感触の残滓をなぞるように震えている。彼女はしばらく座り込んでいたが、ぴよいと飛び上がるように立ち上がった。

もうすっかり夜だった。星明りもない真っ黒な空の片隅で、唯一添えられた飾りのように月がぼんやり輝いている。

彼女は帰り道を走り出した。その目は猫がまた出てくれるという期待を一切しておらず、真っ直ぐ道の先を見ている。猫は気まぐれで、滅多なことでは近づくことすら許してくれない。触れるほうが珍しい。激レアだ。猫が逃げてしまうのは分かっていた。だって、だからこそ逃げられないよう懸命になっていたのだから。

彼女は夢中になって嬉しそうに帰り道を走っている。

帰り道の終わりにいる彼女の母に、この出来事を伝えるために。

（後書き）

この小説を書いたのは一ヶ月も前です。
ちよつとひねくれた小学生の「彼女」の人生観、ひいては私の感じて
いる人生観を漠然と込めていました。

今、病院にあります。

母が脳の動脈から出血したという状況で、非常に不安定な容態です。

私のあり方を発信するのは、そしてその小説のキーパーソンとして母親という存在が日陰に存在しているということは、主人公が小学生だったことからの必然性であり同時にそもそも創作のテーマとして選択したことは、全くの偶然ではありますが、意義深いように思われました。

なので、取り急ぎ投稿することにした次第です。

訂正

あまり、作者の都合で「釣る」のは好みでないので、感想をいただける場合は作品単体として、と思います。

追記

私自身のほうは、二度と伝えることが出来なくなってしまうしました。

作品内の彼女はどうか存分に小さな幸せを母と分け合ってほしいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6809t/>

猫

2011年5月30日21時25分発行